『千葉大学　ユーラシア言語文化論集』17（2015）：31 － 46

内モンゴル・ホルチン地方のブォ（シャマン）の死後の世界

サランゴワ

キーワード　ブォのあの世、ブォの樹、チャス・チャガン・オール（白雪山）、ベーリ・ソーリ（ステダス）、surleh(樹上葬)、bonmleh(土葬)、ブォの亡き霊の再生、永遠不死の命（霊魂）、連続性

はじめに

ホルチン地方[1]では、1960 年代以前、亡くなったブォ（buu）[2]に対する 2 つの葬法があった。１つは、「surleh(スルレフ)」で、もうひとつは「bomleh(ボムレホ)」である。前者は樹上葬、あるいは風葬で、後者は、土葬である。仏教を受け入れることを抵抗した保守派の黒い方向のブォは「スルレフ」葬法、白い方向のブォは「ボムレホ」葬法を取るという説があるが、必ずしも絶対的ではない。葬制はその民族の死生観の具現化である。ブォの死後の世界の観念に霊魂についての信仰が最も集約的に体現されている。本論で、ブォの葬制とブォのあの世について調査で得た第一次資料に基づいて分析する。

1. ブォの葬制

ホルチン地方では、以前、ブォが最後の息を引き取る直前、まだ虫の息のうちにその体を解体し、まず胸部を切開し、次に、四肢、頭、胴体を切断して、「ブォ・ネ・モド」（ブォの樹）の枝にかけておくのが多くのブォにとって、もっとも望ましい葬儀だった。息を引き取る前に間に合わなかった場合、遺体をブォの樹の近くに運んで解体した。これと並行してまたは、遺体を解体せず、木造の棺に入れて山やブォの樹にかける方法もあった。言わば、樹上葬兼風葬である。前者を「スルレフ（surleh）」と言い、後者を「ヒー・デール・タルビホ」（空気に載せる）と称する。特に、体を解体して、樹にかけることを「スルレフ」と呼ぶ。体を切断する葬法を、モンゴル語で「ハダホ」という。「ハダホ」は、「切る」で、一般的に、草や畑の作物、薪を切ることを指す。「切る」を意味するモンゴル語には、また、「ヘルチフ」、「オットロホ」、「チャブチホ」などがある。では、なぜ、草や作物、薪を切ることを「ハダホ」という動詞で表現するのか。「ハダホ」を用いた時の共通点は、根を残し、根から上の部分を切り取るということである。草や薪用の樹の上部は切り取っても、翌年になると、再び生える。すなわち、「再生」する。「ハダホ」という語に「再生」という意味が潜み、したがって、亡きブ

[1] 内モンゴル東部に位置しており、現在は、狭義的に、通遼市、ヒンガン（興安）盟を含んでいる。
[2] ブォとは、ホルチン地方において、シャマンの総称であり、男性シャマンを指す用語でもある。女性ブォをオドゲンと言う。しかし、近年、シャマニズムが再活性化する中で、男女ブォを区別して呼ぶことがなく、名前の後ろにブォを付けて呼ぶようになっている。

ォの体をばらばらに切る「ハダホ」という表現には、ブォの霊魂の再生という意味が込められている。ブォの肉体が滅びても霊魂が霊界で生き続け、しかも後継者の守護霊となる。後継者の体や言行を通じて「再生」が実現される。

「スルレフ」の語根は、「スル」で、ホルチン地方で、現在一般的に、「スル・テイ」で「威勢がある、勢いが溢れる、元気な佇まい」を表現し、「スル・ウゲイ」で、「元気がなく、勢いがない」ことを指す。フレ旗では、「スル」が「台」を指す。現在、ホルチン地方で普通の場合、「スル」をブォの葬儀を指す「スルレフ」と関連付けては考えられていない。それは、現在行われていないからである。新疆に住むモンゴル人は、物を置く台の脚を「スル」という（新疆出身者で、内モンゴル大学の学者タヤの教示)。しかし、ホルチン地方では、このように表現する事例とまだ出会っていない。帝政ロシアの学者 G. N. ポターニンの『西北蒙古誌』に、モンゴル国アルタイ（ホブト県）に住む「タンヌ＝ウリヤンハイ人のところでは、有名なシャーマンだけを、死後、四本の柱の上に横へられた横木、即ちセルへ寝かすのである」[G. N. ポターニン　1945：176] と記している。「セル」は、「スル」のことである。「スル」は、有名な亡きブォの亡骸を安置する柱に設置した横木、即ち台を意味している。新疆のモンゴル人は、「物を置く台の脚」を表現し、オリヤンハイ人は、「台」の意味で使う。したがって、「スルレフ」は、スル（台）に載せるという意味として推測することができる。ホルチン地方で、その意味がブォの葬制に伝承され、それに含む内容が異なる。

ホルチン左翼中旗 HA 村在住のドルジ（1936-2015)・レイチンによると、土葬を「シロイ・ド・オルレホ」(土に入れる、土に埋める）と言い、かつては、ブォを土葬しなかった。亡骸を「スルレフ」するほかに、樹、山、高地に放置する。これを「ヒー・デール・タルビホ」と呼ぶという。「シロイ・ド・オルレホ」という語と対照的である。そうすると、早く転生（トゥルレ・オロホ（oluh)）できるという。ここで言う「転生」は、仏教における転生ではなく、ブォの亡霊が後継者を選び、守護霊として機能することを意味する。ドルジ・レイチンは仏教における転生を意味する「トゥルレ・オロホ」という語でブォの再生を表現した。これは、仏教の影響による用語の混用であるが、具体的には、内容が異なる。一般人は、生身の人間として生まれ変わるが、ブォは、ウル・フルグ[3]（乗り物＝後継者）を見つけてそれに憑依する。

ブォの分断された体を掛ける専用の樹をホルチン地方で、「スルン・モド」、あるいは「ブォ・ネ・モド」(ブォの樹）と呼び、周辺村の人々に神聖視される。多くの場合、村はずれにあるが、一族の墓場の周辺にあることもあり、家系の属性を示す。ホルチン左翼中旗 BAO 町 YAN 村の白虎ブォ（1962 年生）の先祖の墓場にブォの樹があり、1950 年代以前、亡くなった先祖のブォをそこで樹葬（スルレフ）した。亡きブォを具体的にどのように「スルレフ」していたか。韓美芝（1928 年生）ブォは

[3] ウル・フルグのウルは、子供、フルグは乗りもの、特に馬を指す。すなわち、守護霊から見れば、ブォは、守護霊の乗り物である。ブォの身体に憑依して、その体を介して機能するからである。

義理の母親から聞いた話を次のように語った。

図 1、左側、白虎ブォ

2007 年 1 月。

図 2、右側、韓美芝ブォ。

ブォが亡くなる直前に自分のジルヘン・オンゴッド[4]を飲み込むと心臓に付着する。食道を通り過ぎて、心臓に到達するのは、霊的力（オビドス）である。勇気がある人に頼んで、ブォが生前使った剣で胸を切開して（ハダホ）、心臓に付着しているジルヘン・オンゴッドを取り出す。後継者が現れるとこのジルヘン・オンゴッドを含めた先代ブォの神具をも祭祀する。先代ブォの霊が後継者に憑依すると非常に霊験あらたか（メルゲン）だと言われている。1946 年に黒い方向のブォであった、義父は、臨終の際に苦しみつつ、ジルヘン・オンゴッドを飲み込んだ。そして、「勇気ある人を見つけて、わしの『チェージ・イ・ハダズ[5]』（胸を切り開いて）、心臓についているジルヘン・オンゴッドを取り出して祭りなさい」と遺言した。義理の母親が数人の人に頼んでみたが、恐怖感を覚えて、解体することを憚った。結局、そうしてくれる勇気のある人が見つからなかった。仕方がないので、ジルヘン・オンゴッドを取り出すことがなく、遺体をばらばらにせずに台に載せて、現在の赤峰市バーリン左旗にあるチョット・ハン山に安置した。義母によると、遺体を載せた台は次のように作った。高さ[6]がオンドルのほどある 6 本の脚がついた板を作る。板と脚を固定する際に、金属の釘を使ってはならず、必ず木製の釘を使う。義理の父親の遺体を載せた板には、竹でできた釘を使ったという。板の上に亡きブォを載せ、山や高地、あるいは、樹に安置する。家から安置する場所に運ぶ際に、車に載せないで担ぐ[7]。棺に入れて埋葬しない理由は、もし、土葬すると霊が後継者に憑いた場合、能

---

[4] 直訳すれば、中心たる、心臓たるオンゴッドで、銅製でできており、ブォの守護霊が憑依する神具である。

[5]「ハダホ」の語根は、「ハダ」で、接続詞の「ズ」を接続すると「ハダズ」という副動詞になる。

[6] ホルチン地方のオンドルの高さは、大体 50 ㎝から 70 ㎝の間である。

[7] ホルチン地方では、1990 年代までに、長寿して天寿を全うした人を福がある人間として尊敬し、墓場まで担ぐ習俗があった。8、90 代で亡くなった老人が特に尊敬され、家から運び出す際に、家族、親族、信仰（スジグ）の篤い村民が一列に跪くなか、棺を担いで通る。1983 年に、ジャロード旗ガハイト村の 92 歳の老婆の葬儀で、出棺した際、親族や村人は庭から道路まで 100ｍほどの列を作ったという。このほか、子孫が死者への思いが強い場合、60 代で亡くなった場合でも墓場まで担ぐこ

力が落ちるからである。板に載せて野原においた方は霊力が鋭く、託宣の正確さが高いという。

調査に同行してくれた筆者の父親（1942 年生）が、韓美芝ブォの語るのをここまで聞いて、「後継者を考えてこのような葬儀を望んだと思う。肉体の自分を思うなら、棺に入れることを望むでしょうね」と話したら、韓美芝ブォは、「そうです。自分もそう思う」と語り、「義理の父親を望むように『スルレフ』ができなかったため、ジルヘン・オンゴッドを取り出すことができなかった。それが原因で、義父の霊がわたしに憑依すると、胸に圧迫を感じ、すぐ言葉を発することができず、しばらく経ってから言葉を発するという[8]。それは、胸を切開して、心臓からジルヘン・オンゴッドを取り出さなかったせいである」と説明した。韓美芝ブォは、義理の父親の遺体を「スルレフ」できなかったので、守護霊が憑依したとき見られる特徴をそれに帰している。

図 3
雑談中のドルジ・ブォ（右）とイテグル（1928-2014）・ブォ（左）。2006 年 8 月。2 人は、1.5km 離れて住んでいたため、知り合い同士だったが、顔を合わせる機会があまりなかった。調査のため、ドルジ・ブォの住む村の若いブォの家に招き呼んだ。

フレ旗在住のラシ（1926-2009）・ホンダン[9]を、その自宅でインタビュー中に、村に住む農民男性（1944 年生）が入って来た。当時、筆者はラシ・ホンダンからちょうど「スルレフ」について訊いていた。男性は、「ブォは、自らばらばらに解体して「スルレフ」を望むのは、後継者のことを考えているからである。遺体をばらばらにすることで、亡きブォの霊の力が増し、後継者に憑依するとき能力が優れた守護霊になり、これが現役のブォの力の表現となるからである。ブォがもし、自分自身のことだけを思うなら、決して亡骸をばらばらにされることを希望せず、土葬を望むでしょう」と言い、ラシ・ホンダンが「まさにそうである。世襲型ブォの場合、伝承を重んじるため、自分のことを思うより伝承のことをより重視してスルレフを望む」と声を大にして説明した。

ともある。1985 年に、ガハイト村に住む 60 代の婦人が亡くなると、子孫が、担ぐことを望んだ。しかし、出棺の日に雪が降ったので、車で運んだ。ブォの場合、死去した時の年齢と関係なく、墓地まで担ぎ、ブォへの敬意を伺わせる。

[8]伝聞式で語ったのは、韓美芝ブォに義理の父親の霊が憑依し、トランス状態に入るとその間の自意識を失っているため、意識を取り戻した後、当時のことを家族から聞いたためである。

[9] ホンダンとは、シャマンの一種で、モンゴル・シャマンズムの信仰の中で最高の神であるテングリの甥と言われ、主に、祭天儀礼を行った。そのほか、占い、治療などブォの機能を果たす。

図 4
ラシ・ホンダン
写真の出典は、吾喜雑誌[10]。

かつて、ホルチン地方で、ブォの体をばらばらにして、樹にかける習慣があったため、「ブォの樹」と呼ばれる神聖視された樹が現在も存在する。ホルチン左翼中旗 HA 村から南へ 1Km 離れたところに、楡のブォの樹が生えており、その周辺にそれより細い楡の樹が多く生え、小さな林をなしている。周辺の樹と草にも全く手を入れず、自然のままにしているため、枝と葉がほしいままに茂り、不思議な雰囲気を醸し出している。当村の人は、このブォの樹に登ったり、枝を切ったり、落ち葉を集めて燃料として使うことをしない。当村のマングサ・ブォが 1963 年に病気治療の際に、悪霊にやられて亡くなった後、弟子のドルジ・レイチンが村人の協力でこのブォの樹に体をばらばらにして掛けておいた。それ以来、再び行われていないという。当村に住む農民のテムルボルド（1940 年生）老人によれば、1950 年代半ばまでブォの樹の下で祭天儀礼を行い、雨乞いをしたと云う。羊や牛を供犠として捧げる。また、儀礼食として、黄色の粘黍のご飯を牛乳で炊く。老人あるいは、子供をブォの樹の前に座らせて、「シャンシン・エブゲン」（シャンシの老人、樹に宿る主を象徴）と称して、口にご飯を塗りつける。そして、「雨は降りますか」と質問すると、「降る」と答え、「降る」という言霊によって、天が雨を降らせてくれることを願う。ホルチン地方に、1950 年代以前に、村の中や村はずれに、「シャンシン・モド」と称される樹があった。多くの場合、１本か 2 本、あるいは数本からなり、数本の場合その中の 1 本がシャンシン樹である。その樹も雨乞い儀礼と密接な関係があり、普段、通りかかる際に馬や車から降りる。また、枝を切らない、登らないなどのタブーがある。HA 村の場合、ブォの樹とシャンシン樹が一体となっていることが伺える。

新入りのブォがこの樹の枝に布片を結んで飾り、礼拝する。子供がよく夭折する場合、親は健やかな成長を願って、幼い子供にブォの樹を拝ませる。子供がいない夫婦は、子授けの願をかけ、ブォの樹を拝む人もいたという。当村の 50 代の男性が数年前に数百メートル離れたところで放牧している際、樹の下に仰向けに横になって、下から樹の枝を見ながら、「このように切ると椅子が作られ、そのようにすると机が作られる」と指で指しながら思った。しかし、その日に家に帰って、理由もなく足が腫れあがり、動けなくなった。本人は、「ブォの樹に対する不敬な行為によるもの」と判断して、

[10] http://wuxizazhi.cnki.net/default.aspx。

線香を焚き、酒を捧げ、謝罪した。その後、徐々に回復したという。また、2003 年の記録的な寒い冬、HA 村の南側にある村の 40 代の主婦が当時 17 歳だった娘をつれて、ブォの樹の北側の枝を鋸で伐り取り、燃料にした。翌年、娘は原因不明の自殺をした。その娘が美女だったため、人々は非常に残念に思った。娘の死の原因を周辺の村の人々は、ブォの樹の枝を切ったことに帰している。2007 年 8 月、筆者は切り取った跡を確認した。このようなエピソードは遠近の村々に伝えられ、人々がブォの樹の霊力に対する信仰を深め、禁忌を守る意志を強くした。また、ブォの樹に関するエピソードや禁忌は周辺の村人の間で一般的に知られているにもかかわらずこのような出来事が発生すると言うのは、信仰と禁忌が周辺の村の人々の間で一致したレベルで共有されていると言いがたい。

筆者がこれまでに確認したところでは、HA 村のほか、現在残っているブォの樹、あるいは、聖なる場所として残されているところは以下のようである。ホルチン左翼中旗 BAO 町のドンダ MAN 村の南側に楡の小さな森がある。ブォの樹が枯れてしまったが、下から新しく生えている。同じく中旗のジャマト町の南東部の「スルレン・モドン」（ブォをかけた樹）という村があった。樹は現在残っていないが、村の名前は、100 年以上前に、ブォの遺体をバラバラにして掛けておいた樹にちなんでつけられたものである。2015 年 9 月、筆者が当村を訪ねたとき、村人はその伝承を筆者に語ってくれた。

図 5
ホルチン左翼中旗 HA 村の南側にあるブォの樹。
ありのままの自然の姿で生えている。
北側の伐り取られた太い枝がはっきりと見える。
2007 年 8 月。

図 6
ホルチン左翼中旗ドンダ MAN 村の元ブォの樹で、下から新しく出てきた樹が現在「シャンシン・モド」として村民に信仰されている。近年、豊作、村民の無病息災を祈願して毎年祭祀している。樹にチベット仏教の経文を印刷した旗や礼巾のハダグがたくさん捧げられている。

図 7

シャンシン・モドの祭祀の司会者を務めるホナ・ブォ（右から 2、1972 年生）と夫のションホル・ブォ（左から 2、1972 年生）、ホナ・ブォの弟で、ブォのバヤン（左 1、1977 年生）、ハス・オーラ・ブォ（右 1、1970 年生）。ホナ・ブォの守護霊とハス・オーラ・ブォの守護霊は生前仲が良かったため、両ブォの仲もよいという。両図は、ともに 2015 年 9 月撮影。

遺体を切断して風葬する目的は次のように考えられる。まず、行為から見れば、これは、遺体に対する迫害だが、聖なる迫害である。「霊魂は、心臓や骨、血液に宿る」という言い回しがあるが、命は体全体にわたって存在するため、命の象徴ともなった霊魂が体中に宿っており、遺体をばらばらにすることで、体から完全に出て行く。守護霊として速やかに再生し、後継者に憑依してほしいとの願いのあらわれである。このように、ホルチン地方で、ブォが虫の息のうちに解体して、樹にかけて置く習慣があった。現在は行われていないが、かつてのブォの樹が残っているところもあり、土地の住民の信仰を受けている。だが、シャマニズムの再活性化の中で、このような樹上葬が復活することはなかった。現代人から見れば、それは非文明的で、野蛮的な行為であり、また、政策にも反する行為となるからである。

次にブォを土葬する「ボムレホ」を取り上げてみてみよう。

土葬を「ボンムレホ（bomleh）」と言うと、敬意表現になる。近年、ホルチン地方で、先祖の墓を土からレンガやセメント造りに変えることが盛んに行われ、形状は多種多様である。このことを「ボンムレホ」と表現している。すなわち、先祖の墓の地上の形を改築することを指す。その中で下部は長方形を示し、上部はドーム状で、白く塗ったものが多く見られる。また、下部は長方形で、上部はピラミッド状のものもある。フレ旗在住の白い方向のラシ・ホンダンによると、自分をブォにした父方の祖父のキョウダイが 1930 年代に亡くなるとき、体を家族は代々伝承されてきた方法、即ち、体を解体して樹にかける「スルレフ」方法にしようとしたが、本人は、「ボンムレホ」、つまり土葬するよう告げ、その理由を「自分を土葬しないとテングリ・イン・チャグ（天の時、時代の風潮）に反することになる」と説明した。そのため、土葬し、周辺の村の人々に「ボムン・ネ・エブゲン」（土葬された老人）として崇拝されたという。実は、ラシ・ホンダンの祖父の墓の外観は、地上は土饅頭の形である。ラシ・ホンダンは、祖父が言った「テングリ・イン・チャグ」とは、1950 年代以降、宗教文化や民間信仰に対する弾圧を行うことを予知していたと理解している。1950 年代以降は、亡き

ブォを「スルレフ」ことがほとんど見られなくなり、土葬するようになった。翡翠（1966 年生）ブォの守護霊、即ち義理の父親の父方の叔父が、1950 年代初期に亡くなった。ブォの習慣に従って、村の南側のブォの樹に体をばらばらにして掛けておくことを本人は希望したが、ちょうどブォが弾圧される時代だったため、意に反して土葬した。その妻が、ブォの弾圧を目の当たりにして、霊魂が再び出てきて子孫に憑依しないように、先祖の墓とは別のところ、即ち、村から約 1Km 離れた東南方向に葬った。埋葬する際、再び出てこないよう、ブォを招き一連の処置を取った。亡骸の胸部にブォがタルニ（呪文）を念じながら犂を載せ、棺の 4 隅に柏の釘を差しこんだ。現在、この墓は地面に目印がない。筆者は 2007 年 8 月、翡翠夫婦の案内で実見したことがあり、翡翠ブォが酒 500ml 入りの瓶を持って行き、墓の周りを時計回りに一周して撒き散らして捧げた後、深々と額ずいた。翡翠夫婦の話によると、子孫が通り過ぎるとき必ず馬や馬車、バイクから降りる。翡翠ブォの夫が、2006 年の春のある日、うっかりして馬車から下りずに通り過ぎたところ、馬が暴れ出して、夫が車から落ちたという。2007 年 1 月にホルチン左翼中旗 TA 村在住のホブル（1926-2007）・ブォが亡くなると、現在の政策では火葬だが、遺族は敬意を表し、土葬することを望んだ。そして、通遼市にある内モンゴル民族大学ホルチン民俗文化研究所の研究者らと連絡を取り、地方の政府に斡旋してもらって、土葬が許可された。

図 8　ホブル・ブォ、2007 年 1 月。
ホブル・ブォ本人は、亡くなると、すぐ転生したかった。
シャマニズムの信仰では、ブォが亡くなると 3 代の後継者ブォの守護になってから普通の人のあの世に赴き、そこから人間として転生すると言われている。

2. ブォのあの世

ホルチン地方で、ブォのあの世はチヤスチャガン・オール（白雪山）の 1 本の生い茂る樹にある。ブォが亡くなると亡霊がこの 1 本の樹に集まって修行し、次の後継者を選び、後継者に憑依して、自分の霊力を発揮する。亡きブォの霊は、生前の親族、縁者を守護すると言われる。普通の人間が亡くなるとエルリグ（普通の人のあの世）に行く。ブォの場合は、その亡き霊が普通の人のあの世ではなく、ブォのあの世に赴くと言われる。ブォの 1 つ目のゴル・スゥンス（中心たる霊魂）はブォのあの世であるベイリ・ソーリに赴くとされる。ベイリ・ソーリは、すなわち、ブォの 1 本の樹にブォの 3 つの霊魂の中、2 つ目の霊魂が墓を守り、3 つ目の霊魂がこの世をさまよう。ホブル・ブォによると、

亡きブォの霊は3代続けて後継者の守護霊・補助霊になった後、転生するため、死後すぐエルリグの世界に行かないという。また、ブォによっては、「亡きブォの霊はエルリグの世界に行かない」と語る。すなわち、転生しないということである。具体的に何を意味し、ブォの冥府はどこに存在するのか。次のような神歌がある。

チャス・チャガン・オーラ（白雪山）の
チェフル・チャガン・ハダ（火打石の白い岩）に、
生い茂る「シタル・イン・ガッチ・モド（1本の樹）」がある。

神歌に登場する「シタル」という語は、「自身から近いものを指す」［シャッジャ　1998：849］、「そば、隣、近くという意味である」［ニマ　1999：153］。物理的に近い存在を示すほか、「側近、護衛兵」などの意味でも使われる。「シタル・イン・ガッチ・モド（1本の樹）」とは、チェフル・チャガン・ハダの近くに生えた樹という意味である。ブォたちの死後そのゴル・スゥンスがこの1本の生い茂る巨大な樹木に赴き、そこで修行し、力を強めると考えられている。そして、時期が来ると、後継者を選び、その守護霊となる。樹はサンダン・モドすなわち、栴檀の樹である。この樹はブォの帽子にも模られているが、栴檀の樹は、インド原産の熱帯性常緑の香樹で、モンゴル地方に生えない樹である。古くはサンスクリット語でチャンダナと呼ばれ、仏典『観仏三昧海経』では牛頭山に生える牛頭栴檀として有名であった。ホルチン地方で、1本の樹を「サンダン・モド」と呼ばれるのは、サンスクリットの「チャンダナ」に由来すると思われる。「モンゴル人は、昔から1本の樹を信仰していた。それゆえ仏教の神話における1本の樹がブォたちに容易に信仰されることは言うまでもない。それがゆえに、火打石の白い岩の近くにある1本の樹にブォと仏教の思想が融合した」［ニマ　1999：154］。この1本の樹は亡きブォたちの霊の居所である。ブォたちは、それを「アラタン・ベイリ」、「エルデニ・ベイリ」、つまり、「金の居所」、「宝の居所」と褒め称える。ブォは、守護霊を招き呼ぶ時に、「金の、宝のベイリ」から召還し、さらに墓から呼ぶことがある。降臨してきた守護霊がブォに憑依して、オンドルに腰をかけると、ブォのベイリの様子を尋ねる挨拶から始めることが多い。守護霊がそこから降臨してきたという想定である。ブォのあの世は、普通の人々の死後の世界とは区別され、ブォのアイデンティティを示す重要な特徴となる。「ベイリ・ソーリ」という語は、ブォの霊の「居所」（ベイリ）を指し、守護霊の「座所」（ソーリ）も意味する。例えば、1本の樹に1800、18000、12000ベイリ・ソーリがあると言われることがあり、それは樹にあるブォの霊の「座」を意味している。「シタルの1本の樹」をまた、「ブォの1本の樹」と称する。ブォのベイリ・ソーリはすべてそこにある。

包月季ブォ（1968年生）によると、守護霊たちは、能力の強弱、黒いブォと白いブォの方向別に、この1本の樹の枝に座っている。弟子ブォの守護霊が降臨してきて、ブォの1本の樹のどの方向の何

番目の枝に座っているかを告げればすぐ分かる。もし白い方向のブォと称しつつ、東の 3 つの方向に座っていると言えば、これは間違いである。すなわち、この守護霊は偽者である。また、黒いブォなのに、自分の居場所を白いブォの位置する西の 3 つの方向へ言うとまた間違いである。言い当てると本当の守護霊であることが判明し、守護霊の能力の程度も分かる。また、シタルの 1 本の樹がブォの装束の重要な構成部分である「ブォの帽子」のシンボル的な存在となっている。ブォの帽子の五冠に彫刻され、帽子の天辺に設置されている。

図 9
弟子たちと一緒に弟子の守護霊を招き呼んでいる包月季ブォ（左から 5 番目）。2012 年 3 月その自宅で撮影。
これらの弟子は、当時は、すでに 1 人前のブォとなっていたが、取材に応じて、弟子たちを呼んできてくれた。

図 10、11 ともに 2013 年旧暦 7 月 7 日（8 月 13 日）に行われたブォの試練を通る儀式に参加中のブォたち。筆者もこの儀式を参与観察した。樹の上に泊まる鳥は霊魂の象徴で、ブォの助けとなる精霊で、霊魂を運ぶ使者である。ブォの帽子は黄銅制。写真の出典は、中国山里紅サイト[11]。

[11]山里紅　http://www.lhslh.com/view.php?tid=1020

鳥居きみ子が 1907 年に、当時、ジョー・オダ盟（現在の赤峰市）に含まれていた西ジャロード旗（現在のジャロード旗）の女性ブォ・タモと弟子にインタビューして、次の記録を残している。「其巫女人の信じて居る神は、長白山に居つてオゴトと云ひます。神様の種類は、バツトルオゴトとチュグイオゴトと云つて、東と西の神様が二つあると申します」[鳥居きみ子　1927 : 1084]。鳥居きみ子は女性ブォの信じている神、つまり、守護霊の居場所を「長白山」と記しているが、ホルチン地方のブォたちのあの世の「チャス・チャガン・オール」、直訳すれば、「白雪山」のことだと思われ、ホルチン地方のブォのあの世を記録した初の資料ではないかと推測している。

高き白雪山に聳える、火打石の白い岩の近くにある 1 本の樹という表現から、ブォのあの世は高所にあることが伺える。すなわち、この樹は天に届く樹である。ホルチン地方のブォは、次のように歌う。

シタルの 1 本の樹の
枝はすべてサナル（慈悲深い守護霊）で、
根はすべてロスである、

枝や葉に守護霊が憑依しており、その根にロスが憑いているという意味である。ロスは、地霊・水神を意味し、陸でも水でも見られる動物の蛇で象徴されることが多い。ブォの入巫儀式である「イスン・ダバ・ダバホ」（9 つの試練を通る儀式）を表した図にもこの内容が見受けられる。真ん中にブォの樹が描かれ、ブォの亡骸を棺に入れて、ブォの樹に載せられてある。ブォの樹の下に蛇が巻き付いている。（図 12↓を参照）

伝承によると、シタルの１本の樹に亡きブォの霊たちのリーダーの６人の師匠の霊がいる。モンゴル語で、「テルセグド・イン・ジョルガン・バッシ（頑固・反逆の６師匠）」と言い、仏教に順応しなかった、あるいは仏教と戦ったブォたちの霊と称し、また、「ブォ・イン・ジョルガン・バッシ」（ブォの６人の師匠）とも呼ぶ。ブォが守護霊を招請する際に、6 人の師匠に祈りを捧げることがある。それは、6 人の師匠は、ホルチン・ブォの共通の崇拝するオンゴッド（守護霊）になっているからである。ホブル・ブォによれば、この６人の師匠は、①ホルチン・ブォの元祖のホブグタイ、②アタ・サマン、③ベンド・アバイ（女性）、④焼いた肉を食べないシラルジ・オドゲン（女性）、⑤テブ・テングリ・フフチュ、⑥フフレ・オドゲン（女性）である。テブ・テングリ・フフチュ・ブォは、『元朝秘史』に登場する大ブォのテブテングリ・ココチュである。6 人の師匠の名前が異なる場合もある。たとえば、「アタ・サマン、ホブグタイ、ベンド・アバイ、シラルジ・オドゲン、ボームル、家畜の神ジャチ」［フルレシャ　1998：202］の６人とされることもある。ホブル・ブォによると、この６人の師匠は、ブォたちの行動を監視し、守護する。もしブォが好ましくないこと、例えば、許すべき霊を許さないで徹底的に対処する、クライアントの貧富の差によって態度を変える、愛欲に溺れる、クライアントの金銭を多く取る、能力を誇って、倫理に反する行動を取るなどした場合、死後、ベイリ・ソーリでこの６人の師匠の審判を受ける。こうしたブォの存命中にも、守護霊が憑依をやめる、不幸に遭うなどの罰を受けることがある。死後、ゴル・スゥンスがブォのあの世に行くが、守護霊として、後継者を選ぶ時間を延期されたり、力を弱体化されたりされる。モンゴル人の転生概念には、仏教で言う因果応報観が無かった。しかし、亡きブォの霊がブォのあの世のベイリ・ソーリで６人のリーダーの審判を受けるということは、仏教の地獄を思い起こさせ、仏教の輪廻観がブォの死後を影響していると考えられる。

さて、「火打石の白い岩」という表現を少し検討してみたい。一見したところ、「チャス・チャガン・オーラ」（白雪山）、「チェフル・チャガン・ハダ」（火打石の白い岩）と、モンゴル語の詩の大きな特徴である頭音を踏んでいるが、さらに、そこには火に関する信仰が潜んでいる。ホルチン地方で、守護霊を火で象徴することがある。火打石と鉄片を打ち合わせると火が発する。そのため火で象徴される守護霊がそこに潜んでいると考えられる。

では、ブォのあの世である、白雪山の火打石の白い岩の近くに生い茂る、1 本の栴檀の樹はどこにあるであろうか。包月季ブォが亡き伯父のブヘジヤ・ブォ（1926-2004）に教わったことによると、白雪山から見れば、人間の世界は、下にあり、白雪山の 7 日間は、この世の 7 年であるという。ホブル・ブォは、白雪山は、北西の方向のモンゴル国にあると考えている。フレ旗在住のラシ・ホンダンは、次の神歌を歌った。

ノン川の彼方に、

ノハイ（犬）国の此方に、
タイジ（貴族）の 2 柱のボームル（家畜の神）がおり、
そこにホブグタイ（ホルチン地方のブォの元祖）の像があり、
白雪山に聳える火打石の白い岩がある。
そこに 93（段）の階段があり、
その頂点に尖った赤い岩があり、
その上に茂る、ただ 1 本の巨樹の
枝にすべての慈愛深き守護霊が存在し、
根がすべてロスである。
その樹に 1 万以上のベイリがある。
守護霊をそこから招き呼ぶ。
それは南西の方向にある。

ラシ・ホンダンによると、エルリグも南西の方向にある。そのため、南西の方向から風が吹くと「魂を呼んでいる」と言う。魂をエルリグに持っていこうとしていることの表現である。ラシ・ホンダンの先祖は、仏教に帰依した白い方向のホンダンである。西南方向は、チベット仏教の仏が住む聖地として信仰されるため、ブォのあの世も、一般人のあの世もその方向にあるという。ラシ・ホンダンがここで歌う、ノン川は、ホルチン地方から見ると、北東部にある。神歌の中に残ったが、伝承の過程で位置が曖昧になり、信仰が複合したのであろう。ラシ・ホンダンの神歌では、1 本の樹は、とにかく高いところに位置していると想定されている。

ホルチン左翼中旗在住の黒い方向のサイナ・ブォによると、ブォのあの世の白雪山は、北東方向にある。そのため、守護霊を招請する際に、北東方向に向って酒を撒き散らして捧げる。満洲族のシャマンが亡くなると霊魂が現在の吉林省の長白山に赴くという信仰がある[石光偉、劉厚生　1992:174]。サイナ・ブォのイメージしているのは、長白山ではないかと推測される。このように、ホルチン地方のブォたちの、白雪山の場所の理解は必ずしも一致しない。しかし、そこにある 1 本の樹に亡きブォたちの霊が集まるという概念には変化がない。韓美芝ブォによると、自分に降臨してきた先祖の守護霊は、オットルゴイ（宇宙、天界）の北西部にあるシフルと呼ばれる樹に住んでおり、そこから降臨していると伝えるという。韓美芝ブォの言う「シフル」の樹は、「シタル」の樹を意味していると推測する。

モンゴル国の場合、チ・ダライによれば、「新米ブォはブォになるすべての準備を終えた後、まず、土地の聖なる場所（オンゴン・ガジャル）に行き、拝跪してから新ブォとして誕生する。たとえば、昔は、アルタイ山脈のチャソト・ハイルハン（聳え立つ雪山）という山の峰にある溜め池の中に茂る

栴檀を拝む」[チ・ダライ　1959：147 - 148]という。この信仰はホルチン地方のブォの白雪山信仰と類似する。ホルチン地方のブォの言う「チャス・チャガン・オール」とモンゴル国の「チャソト・ハイルハン」の特徴は、①雪が積もった高い山、②繁茂する 1 本の栴檀の樹、③ブォたちの霊の住居、④ブォの信仰する山、⑤一見、山と樹に関する信仰だが、実は、聖なる樹に対する信仰が最も重要であり、山と樹の高さと樹の豊かな茂りが強調されている。聖なる樹は天に通ずる樹でもあり、ブォの霊と守護霊が天に昇る際の梯子でもある。

まとめ

ホルチン地方のブォの葬制には、伝統的に、2 つの方法がある。１つは、surleh で、もう１つは bomleh である。前者は、樹上葬で、後者は土葬である。土葬は、仏教の影響を受けた白い方向のブォが取る方法であるが、必ずしも絶対的ではない。surleh は、ブォの遺体をバラバラに切断して、ブォの樹に掛けておくことを指す。ホルチン地方で、ブォの樹と呼ばれる樹が存在しており、かつては、ブォの遺体をバラバラにして掛けておく樹である。ブォの樹からブォの亡き霊がブォのあの世であるブォの１本の樹に赴くと信仰されている。遺体をバラバラにする目的は、バラバラにすれば、ブォの亡き霊が、ブォのあの世に行きやすく、さらに再生しやすいからである。ここで言う再生とは、再び受胎して生まれ変わることではなく、ブォの亡き霊がウル・フルグ（馬＝乗り物＝後継者）を探し、憑依することで霊力を発揮することを指す。

ホルチン地方のブォのあの世は、普通の人間のあの世と別にあると考えられる。それは、白雪山の険しい岩に生い茂る 1 本の樹であると言われている。ホルチン地方のブォが、守護霊を招請する際、ブォのあの世から招請する。守護霊が降臨して、後継者であるブォに憑依した場合、人々は、守護霊に対して、まずその居場所、すなわち、ブォのあの世であるブォの１本の樹から挨拶をする。ブォのあの世の１本の樹は、ブォの帽子を構成する重要な要素ともなっている。ある意味で、ブォの帽子はブォのあの世を象徴している。繁茂する１本の樹の信仰は、北方諸民族に広く見られる世界の山、世界の樹の信仰と関係があると思われる。それは、不死の永遠の命の象徴である。エリアーデによれば、天上界の神々と地上の人々が世界の山と樹を通して交流すると信仰される[エリアーデ　1974 342-348]。

ホルチン地方のブォの葬制とあの世の観念は、ブォの死後の世界に関する信仰が生き生きと表現されている。現実の世界で、ブォの亡骸を掛けておくブォの樹とブォのあの世であるブォの 1 本の樹、前者は目に見えるが、後者は普通の人の目に見えない。前者はブォの亡き霊の再生への願いとすれば、後者は、ブォの亡き霊の再生を可能足らしめる聖なるあの世である。すなわち、この 2 つのブォの樹は、ホルチン・モンゴル人の命に対する信仰、霊魂に対する信仰が凝縮されている。不死の命、すなわち、肉体の死と霊魂の再生の連続性を示している。

参考文献

日本語

エリアーデ(堀一郎訳)1974『シャマニズム　古代エクスタシー技術』冬樹社

サランゴワ 2011「内モンゴル・ホルチン地方におけるシャマニズムの再活性化に関する文化人類学的研究」千葉大学社会文化科学研究科提出博士論文（出版準備中）

鳥居きみ子 1927『土俗学上より観たる蒙古』大鐙閣

バンザロフ、ウエー・エム・ミハイロフスキー（白鳥庫吉、高橋勝之訳）1974『シャーマニズムの研究』新時代社

モンゴル語

シャッグジャ編著（1994）1998『モンゴル語詳解詞典』中国・民族出版社、蒙古国・文物古籍管理中心共同出版

チ・ダライ 1959『モンゴル・シャマニズム概説（トブチ・トゥヘ）』内モンゴル社会科学院図書室内部資料

ニマ 1999『霊魂・偶像・信仰』内モンゴル人民出版社

フルレシャ、白翠英、ナチン、ボヤンチョゴラ 1998『ホルチン・シャマニズム研究』民族出版社

中国語

石光偉、劉厚生編著 1992『満族薩満跳神研究』吉林文史出版社

謝辞

本論は、筆者の博士論文の一部である。指導教員の荻原眞子先生、武井先生、審査員の中川先生、児玉香菜子先生、趙景達先生にいつも心より感謝申し上げております。貴重なお時間とおエネルギーをいただき、ご丁寧にご指導とご審査してくださいまして、本当にどうもありがとうございます。

学位を取得後、この研究を変わることがなく応援してくださった株式会社カイクリエイツの今は亡き小林文雄社長に心より深くお礼を申し上げます。そして、ご後任の小林裕子社長とカイクリエイツスタッフの皆様に感謝しております。

CES に投稿させていただくため、本稿を吟味、加筆中、さらなる深化の余地を見つかり、先生方々と小林社長、皆様への感謝の気持ちが心の奥底から湧いてきて、目が潤われました。多大な恩を感じております。この場を借りて、もう一度感謝の意を申し上げたいです。本稿が世に出る貴重な機会をくださったユーラシア言語文化論講座の先生方々にもお礼を申し上げます。

先生方々と皆様のさらなるお幸せと豊潤なご成果を心より祈り申し上げております。

さらんごわ(株式会社　カイクリエイツ、ブッククラブ回)

Underworld in Horchin shamanism in Inner Mongolia

Sarangowa

Summary:

This paper introduces and analyses the world after death for Horchin shamans in Inner Mongolia. First of all, it discusses about the treatment of the dead body of a shaman. There were two types of shamans' burials in the past. One of them was anopen burial or awild burial. It is called *surleh* in Mogolian. The actual procedure was, the body of the dying shaman was dismembered by someone with a knife just before the last breath, or did the same to the dead body in case of not being able to do before his/her death. Then, the body parts of the shaman were hung on to a so-called shaman tree.

A shaman tree was a tree on which the body parts of a dead shaman were hung.It was regarded as a sacred tree by shamans and the people. This kind of burial disappeared after the 1950-1960s. However, the remains of shaman trees are still seen in Horchin area today. The main purpose of this special burial was to bring the passed away shamans to resurrection. That is to say, the dismembering of the body let the soul of the shaman leave the body for the shamans' underworld. In the shamans' underworld, the soul of a deceased shaman continues to practice Shamanism, select its successor and become the guardian of the new shaman. The other type of shamanic burial is inhumation. The body of a dead shaman is placed in a wooden coffin and buried.

Then, where is the shamans' underworld? According to Horchin shamans, the shamans' underworld is on a luxuriant giant tree growing on a snow-capped mountain. Then, where is the snow-capped mountain? Horchin shamans have different views on it. Some say that the snow-capped mountain refers to the Changbai Mountain in Jilin Province, located at the northeast of Horchin. Changbai Mountain is a holy mountain for Manchus ,it is also the place where the shamans' underworld is. Other shamans say that it is located in the northwest direction of Mongolia. Although the shamans have different ideas, the belief that the shamans' underworld is on the giant tree embodies the Mongolian tree worship and the belief in life after death. For shamans, a tree is a holy place of revival, and also a symbol of immortality.